

911.3
ゴ
春

凡季
名寄

合類俳諧忘貝春



合類俳諧忘貝

淡水亭藏

合類俳諧忘貝序

夫四季之名寄者從連哥之兩或其家
 之人人令勞筆止厚根誹諧家而從御
 傘于入斧兮噫艸于打墨兮交抄冊出
 于世而曰柱立居曰卷柱些共皆其門
 之用也則用今之俳諧爾者頗可有取
 捨者也左在則祖翁者以下俳諧言魚古
 人了秘訓傲温古知新之旨而彼云用
 捨於噫艸而舉加減云俗習云賞既云
 當用云了四九例給居願者我門有筆



序

違人而有委細之式目則哉與也其後
安永丙子年森森菴師耳語于歸童老
仙而微彼四九例居監定號俳諧二見
之貝上梓而繼祖意止乎從是當門以
之爲規矩準繩弄之爲平生奇觀爾者
在了共懷用之小冊而素非委細之式
目其頃也焉三餘齋鹿文舉四季之題
名而加和漢之書籍及街談巷說都而
十五卷號花實年波草矣此也矣世之
筆達人而實委細式目共諸註大全共

可賞辱哉キヲヤ許卓犖サバカリ之作博覽當我門
之論則半用半捨也焉乎麼予年來遊
于此道而知於梅黃鸝之春則知於紅
葉于鹿之秋而令知于鳥之冬則告來
郭公之夏而夫等者我麼知兮人麼知
而不及一字之註共至于耳聞馴其名
而心不會得其事物者臨時而煩于探
索臬則今哉補於二見見之不足兮省
於年波草之有餘兮其餘加見聞之小
說合類而爲席上之便覽矣左有者王

櫛笥拾^二見^一之^レ貝^ヲ次^ツ亦^テ其^ノ神^ノ風^ヲ哉^ニ伊^ノ勢^ニ
 海^ニ拾^レ聚^ル清^ク渚^ニ之^レ玉^ヲ則^レ非^ズ空^ニ背^ル貝^ノ之^レ空^ニ鋪^ル
 名^ハ共^ニ携^ル之^ヲ袖^中爲^ス要^ト文^ノ之^レ簡^約則^レ不^レ及^ス
 源^氏貝^ノ之^レ密^筆占^ハ猿^ノ厚^ノ聊^ノ助^ク我^ノ忘^ル矢^ヲ了^ス
 則^レ號^シ俳^諧忘^ル貝^ノ陪^リ來^キ

弘化丁未年七月

淡水亭伸也誌



凡例

- 一 季とたり孰とるるのこい「けさ」と冠す
- 一 季の用としてそ季とつねなり發句みは
- 一 季首と跨たりのけい〇けさ」と冠す
- 一 季の用としてそ季とつねなり發句みは
- 一 季の用としてそ季とつねなり發句みは
- 一 季の用としてそ季とつねなり發句みは

一 季寄の書数多ければと類の並置孰とるる

但本書とい二見貝とさしてさす

席上の一覽之便なり。凡そ門々今に季乃
名義と其季の首に出し。月々の數名ハ五門
ふ多門。其席次たの如し。

三才門

是ハ天能人をかりり。三才のこにも。何れに
たの四門の如れ。るお味。門の華出。此委
く。端せん。この門又。數門。こ。日。係。へ。久。れ。と。門。外。の
數。多。き。は。却。て。足。る。と。か。し。れ。る。と。し。

但漢土の故年の耳をく。ぐるの用。と。何。し。る。分
ハ。搦。載。を。す。

氣散門

是ハ生數と載と
終る。と。季。ち。

中本門

是ハ花と。葉。生。る。も。葉。を。葉。生。る。も。亦。花
と。蔬。菜。此。二。用。何。り。て。食。數。と。交。り。て。倍。る。も。

あれと。生。へ。く。門。こ。つ。つ。ぬ。出。せ。主。物。と。し。て。分。別。せ。し。
を。實。い。い。つ。れ。も。食。門。に。出。せ。小。松。引。着。菜。搦。味。人。等。こ
拍。り。し。り。し。門。こ。出。せ。余。い。お。り。て。知。し。一。葉。搦。麦。杖。の
下。食。數。も。何。れ。と。同。し。よ。門。こ。出。せ。門。外。門。外。門。外。こ。ハ

種と。何。れ。を。三。才。門。と
門。と。一。分。り。出。せ。

後食門

是ハ在飯。飲食の數と。載。せ。菓。蔬。こ。ハ。食。は。ぬ。也。
あれ。と。ち。れ。に。し。て。門。こ。出。せ。栗。ハ。論。句。上

食。門。こ。り。て。後。栗。こ。ハ。栗。寂。の。如。れ。も。を。れ。を。悉。く
を。こ。ハ。却。て。足。る。に。餘。り。り。れ。を。栗。の。下。に。取。へ。出。せ。
余。ハ。推。く
知。し。し。

公式門

是ハ公。事。私。事。命。式。と。載。せ。他。公。事。と。日。の
明。と。出。し。亦。私。事。命。式。と。假。し。て。日。の。明。と。出。

を。禁。中。の。行。事。を。禁。に。洩。し。る。分。一。二。と。増。加。せ。れ。も
洩。し。る。も。又。少。く。は。私。事。命。式。の。分。も。粗。増。加。す。れ
とも。省。し。る。も。少。く。は。こ。の。ハ。官。幣。或。ハ。壯。觀。の。行。事
か。く。は。私。と。并。し。字。數。を。く。か。き。を。實。と。増。載。せ。免
より。か。お。ち。にも。字。數。多。く。し。て。句。に。附。し。て。き。ハ
除。り。し。し。ハ。今。將。そ。れ。を。と。り。く。加。す。こ。ハ。お
く。私。事。と。私。事。の。を。本。書。に。一。度。出。せ。る。を。今。加。へ。る
を。及。も。也。思。し。る。也。

一 四季三月渡の分ハ五門の明と。如し。

別と重なりを分りし

一 楽書の歌数本書の中より幸欠まりきを今
も數十頁と増補する事頗る意を加つた
れども本古の短簡より懐用あると
しつれども懐中の用せられと僅に数枚の
を厭ひて書洩さんも惜りれども増補ハ
記憶の助より抱の用控ハ俳諧の常
きハ所控ハ完済し似せしき

但本書の外に歌の増補を

本書の歌に異稱の増補を

一 川書の略目 和三 和傳三才圖會 公事 公事根原

本目 本州細目 八雲 八雲所抄 以竹ハ書名を全く

去り又ハ書名を去るは下も多し

附言

此書天保甲午年集録して巻衣の用と
そ後門人照書すといふも容易なる
こよ明し様の上を後よりいふ
淺見を却て致しぬる事十余年
乞需らるるに原本稍を損
れを再写の心

あるをよとて謀りて竟に割劍の刀に任せて上
 程くひ帯く弘りて席上にて便覧の玩ひも
 ちりしを幸に撰出の本懐を叶ふと云ふ

合類俳諧忘貝

南越福井 淡水亭伸也輯

春

和訓 美解ニ春ヲハルト訓
スルハ暗ルト云美ナリ

青帝

補

太皞

帝○礼月令註太皞伏羲未應之君勾芒少皞氏之
子曰重木官之臣聖神繼天立極生有功德於民故

後主於春祀之四時之帝
与神皆此也下效之

勾芒神

東君

師古曰東
君日神也

蒼天

春為
蒼天

韶光

韶美也春ノ景
色ノ麗キヲ云

青陽

尔雅春
為青陽

正月

三才門

左局月

人の嫡子に登
てかくり

眩月

端月

補

年端月

正月

莫傳抄ニ梅もさゆ 登ふまりぬ
年々月名も殊しく 吹えはせぬ

元月

元月

潜確
類書

正月為瓶
○亦孟瓶

王春月

孟春

孟春ハ始補

初空月

補

霞初月

補
初春月

早暎月

年々小てきみたり月ハ吹ぬきそ
あさなかり小松ひくまの
そ之

補
暮月

莫傳抄くれし月ふせのころん
初春の又さるるころんこえり

右護

律○
月令

正月律
中太蔭

雨水之旨

立春後十五日正月中雨
水中気雪散為水也

春立ツ

新玉

アラ玉トハ改
ルト云心ナリ

宵の年

初年

春立ツ

立春

當年ノ立春去年ニアリテ末年ノ立春又正月ニ
有ノ時ハ中一年立春ナシコレヲ俗ニ空穂年ト云

年始

年花

花ハ華也詩語碎錦ニ梅柳烟霞補
ナトノ景色ヲ云トソ年光モ同

ふり

補
新年

補
若年

元日

初何と

聖節

補
元日

三ツの始

年月日の始
なれん

元三

上ニ補
三朝

上ニ
日一初春

今初の春

花の春

宿の春

神の春

所代の春

玉の春

明の春

國の春

補
君の春

千代の春

春永

三春ノ季長キヲ
云初春ノ祝詞也

初日の出

初空

初曆

補
曆開

民間ニ云
所ナリ

初礼者

御茶

歳初ノ
祝詞ニ

書初

書書

試筆

補
試毫

初灸

初噺

初着

紀夏自大晦日夜
至元旦曉之夢也

初手水

浅初

弓始

七日ナリ豹尾
黄階ヲ思ム

馬系初

初高

店卸

補
買初

懐緘

初荷

湯殿初

松系初

大坂

ナドニハ舟ニ松竹注連ヲカザリテ船具神へ餅酒ヲ供シ水主ヲノ口へ
テ一タン許ノリ出テ漕モドルトソノ日船持ノ家ニテ嘉儀ヲ催シ年
中廻船ノ難ナキヲ
ライノルトナリ

菫草

福初

御當家
月二日

正月

二

遊初

補 彈初 琴瑟

補 吹初 笛

舞初 舞

初芝居 京大坂云

月二日

初東風

初霞

集韻霞雲日氣相薄增白日旁形雲也
○日本ニテ霞ト云ハ露ノフナリ

若水

包井開

除夜ニ井ヲ封シ置テ元朝ニ吞邪氣
ヲ除ク呪ナリ又立春ニ開クトモ

補 若水桶

紀

補 井善水

世諺問答に私ヨモ此日ハ井花水トシテ
あ〜〜〜〜〜水ヲ飲ミ侍ルヨ

蓬菜

喰積

蓬菜ハ神山花実皆滋
味アリコレヲ食ヘハ

元日江次第公夏根
元ニハ立春トゾ

救子

穂俵

奈乃里曾
神馬藻

不老不死居ル処ノ
人皆仙聖ノ種ナリ

串拂

万物ヲ振トル
ノ美トイヘリ

田作

小敷系

二名
トモ

ニ五方家鱈ノ
トシ又俵子氏

橙

代々ノ
祝詞

楯

抽扱

似抽而
最大也

梅子

搗栗

勝ノ字ノ訓
ナル故ナリ

野老

正字草薺蔓葉頗ル
薯蕷ニ似テ小白花

ノ品
トス
江次第ニ茅三日供御膏葉主上
丸掌ニ塗シメ玉フ千瘡膏ナリ
年位神 東方桐
喰積の品の内種串拂楯敷抽扱搗栗の類
了心な〜〜〜ハ歳始のふれ〜〜〜

膏藥

江次第ニ茅三日供御膏葉主上
丸掌ニ塗シメ玉フ千瘡膏ナリ

年位神

東方桐

年柄

掛網

紀事ニ掛竈上至六月朔日和巻
而食之云々如此則辟温疫痲病

諸邪
氣也

門飾

注連飾

釈名ニ注連ハイマシメシ出入ヲ
イマシムルニ繩ハあとき〜〜〜

除夜立之戸内
亦辟邪惡云々

太箸

箸の折まるハ落馬の相と云より折る
さ〜〜〜〜〜元朝羹に用るため

飾蔓

飾海老

飾炭

福藁

正月ノ神ヲ祭リ勸請中
不浄ヲ除ク心ナルヘシ

年男

紀事ニ及若水人謂年
男武家ニハ式正ヲ

勤ル人

福引

寶引

毬打

好〜〜〜

今玉
振々

ト云ハ即今昔ヨリノ毬打ニテ目貫縁跡ノ給様又ハ諸異ノ蒔絵ニモア
リ其形状玉ハ大戸ニ付ル戸車ノゴトシ宝尽ノ内ノ七宝ト云物ノ如ク
彩ル振々ハ木ヲ八角ニ削リ両端ヲ細ク中ブクヲニメ細キ方上ノ方左
右ニ木瓜形ノ穴ヲ穿チ此処ニ玉ヲ付テ惣躰金箔ニテタミ其上ニ雀龜

正月

三

松竹尉姥等ノ繪ヲ彩色ニスルニ用ル時ハ左右ノ玉ヲ取ハナシ別ニメ
是ヲ擲ツ玉トシ八角ノ木ノ木瓜形ノ穴へ竹杖木杖ノ如キ棒ヲ貫キ柄
トシテ是ヲ玉ヲ打毬打トス 注連の内十五日ま 子鞠

破産弓矢 年中ノ邪気ヲ 抜フ為ニトゾ 羽子つく 胡鬼の子 胡鬼板

羽子板 世淡田若小初きりぬぬ呪ひ心秋の初之情
とくし虫出まき改をとりくくぬお子ハ情冷こかくとら

若者子 補 夷也 即 傀儡師ヲ云 攝州西宮ヨリ出 茶茶菜 若者万歳ト云ハ大和
国窪田箸尾西村西

坐太夫所司ノ庭ニテ歌舞ス常 春駒 故多要言小年の始に言を依りて
ノ万歳ハ千壽ヲ畧メ云カ 既よいつくき唄ひ舞りの是を春

弱と名けて都鄙とあり是ハ禁中にて正月七日白 鳥返 乞巧
馬を御覧の事あり是を下にうけて志付のにや云く 人元

日ヨリト五日ニ至リ笠ヲ着白巾ニテ面ヲ覆ヒ手ヲ交、キ祝語ヲ
唱へ門戸ニヨリテ采錢ヲ請フ是ヲ敲ノ与次即ト云又鳥追ト称ス

大黒舞 悲田寺或ハ四ヶ所ノ 鬼假師 是ハ美由一ノ是
出すにや流に口 垣外ノ賤者ノ業也 名長ちる故ニ再
そを不ちうとそ 猿引 鹿板と 無想文賣

清水坂ノ強指赤布衣ニ白布ノ覆面ノ帯符ヲ市中ニ賣 松囃子 三日
ル男女念ヲ懸ル所ヲ祈リ富貴ヲモ求ム其帯符ヲ云 又七日ノ菜粥也云何レカ其正キ
十五日ニ至テ唱謡 福沸 紀事ニ若水ヲ煮ルヲ云亦四日也
鼓舞スルヲ云 又七日ノ菜粥也云何レカ其正キ

ラシラ ストゾ 福福 三日ノ内ニフル雨ヲ 福降 云一説元日ノ雨トモ
いねあぶら 正月ノ寝起ヲ云○寝 与稻訓同故為祝詞乎 首食 補 二首 袴肩
威儀ヲ止テ臨時 新年互贈答之 物總謂年玉 初子日
ノ遊ヒヲ云トツ

節句トバカリハ難ニ季ニツレテハ 具足鏡開 具足鏡開
鏡餅ヲ煮食フ昔ハ廿日ヲ用シニ廿日ト及柄上訓同シ及柄ヲ祝ト云俗
説ニ今世日ハ御當代ノ御忌月ナルユヘニ兼志辰年ヨリ改テ十一日ヲ
用フト 庭電 注連ノ内土ヲホリ炉トメ円 爆竹 十五
云く 居シ遊フ電神ヲマツルニヤ

子日 蜚飼屋ヲ 人日 元日ヨリ六日迄ヲ鶏犬猪羊
掃初ルヲアリ 牛馬ニ配當メ七日人ニ當ル
節句トバカリハ難ニ季ニツレテハ 具足鏡開 具足鏡開
鏡餅ヲ煮食フ昔ハ廿日ヲ用シニ廿日ト及柄上訓同シ及柄ヲ祝ト云俗
説ニ今世日ハ御當代ノ御忌月ナルユヘニ兼志辰年ヨリ改テ十一日ヲ
用フト 庭電 注連ノ内土ヲホリ炉トメ円 爆竹 十五
云く 居シ遊フ電神ヲマツルニヤ

三鉢打厄左羹 細曳 紀事ニ大津ノ人三井寺門前ノ人ト原野ニ於テ
長トモ書ク 大細ヲ争ヒ引勝方ソノ年各福ヲウルト云十三

正月

日ヨリ十四日補 菱葩ほしはふす 爆竹ノ火ニテ餅ヲ焼食フヲ云 則此火ニテ今朝小豆粥ヲ煮ル

水祝 日十五 星附 尻より 紀事ニ新婦ヲ娶ル者アレハ朋友 其家ニ集リ水ヲ桶ニ入レ大ニ其

人ニソ、グ是 枝除ノ謂ナリ 若やく 若返ル 増 十日年越 紀事ニ今夜俗 称十四日年越

各相 上元日 日十五 正月ノ上元ニハ天官福ヲ玉ヒ七月ノ中 元ニハ地官罪ヲ免レ十月ノ下元ニハ水

祝 官厄ヲ解スルヨレ○灯笼見ルヲアリ花燈タト云唐 齊宗皇帝ノ故妻ナリ五万燈ヲトモメ花樹ノ如レトゾ 廿日正月

養父入 紀事ニ正月十六日農工商各遊遊是謂十 六日遊又称藪入中畧藪入元宿入之誤也 雪解

雪汁 雪なくれ 残雪 補 雪間 降つゝ雪の村消み ありとほをりよ

淡雪 春の雪 雪花ハ六出ニ立春ノ 後雪皆五出ナリトゾ 餘寒 巳季 景物

イツレモ殘餘ノ 字次ノ季ナリ 補 春寒 牙返ル 凍返ル

氷解 残氷 凍解 増 土竜打 十レリと地と打ニ浪義ニ法 氣を瀧て括り曳あらくし

正月

氣配門

初鰯 初鰯 白魚 補 目刺 竹串ニテ目ヲ貫キ 曝ホレテ級ニ作ル

猫の魚 猫さな 増 鰻糸魚 月令孟春月鰻糸魚○鰻鯉ヲ取 テ四方ニツラ子進テ食ハス

魚氷上ル 立春ヨリ 十一日目

正月

草木門

福壽子 元日料 庄 茵朶 裏白 庄 一名買朶又鳳尾州 枝長き

楫葉

靴子草 氏

新葉生ひくくのひて旧葉落り
故く名けて連淡の志を祀す
門松

饒松

補 幸木

門松の根をさすをワシ又北國にて
て女の纏を打とりのもあつてハ粥杖の製也

らん

補 鬼打木

上り
補 藁盆子
門松に付て
供物を入

饒竹

松ハ多し世を繁り竹ハ五代を榮るおふれハ
年の始の祝ひに用ゆるより一条様園内設也

松の内
正月十五

日迄

小松

補 子日の松

子ハ北ニ北州ノ千年ニアヤカ
ラントニ松ニ倚ルハ人モ千年

ノ齡ヲ保ツ
ヘキトニ

七種

芥

根白艸又ツミマシ
艸又エグトモ

菘

菘

スバナトハ小菘ニテ
スシナキ心トモ云

蘿蔔

スバノ詞上ニ同レ、ロ
トハ根ノ白キヲ云

鼠麴草

仏耳艸和名母子
艸莖葉白脆シ

驚蟄

ミキ草
トモ

黄氏菜
座 仏

田野備有一名
土器菜又田平子
テ百病ヲ除ス

若菜摘

蘇もやせ

歳時記ニ正月七日夕ク鬼車鳥渡ル家々門戸ヲ打燈燭ヲケレコレヲ禮
フトソ和俗七種ヲウツ唱ヘニ唐土ノ鳥ト日本ノ鳥ト渡ラ又先ニト云

ハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ極ヲ打鳴スハ
鬼車鳥止ラヌヤウニハラフナリ

梅の花

又白草

東告子

その見

この花

補 梅の花

江梅俗云野梅
其花單葉小白

○雄波梅中花淡白千葉○鶯宿梅大白單葉○鎗梅中花白帶淡紅○行幸
梅大花紅千葉輪音梅一物乎○和三ニ古ハ花ト称スルハ梅ナリ中古以
来花ト称ス
ルハ櫻ナリ
和同草木
萌動云々

椿

玉椿

莊子大椿以八千歳
為春以八千歳為秋

下萌

月令
天地

恙松

恙草

松のむハ十クワりのむとてふふニ一度む咲と
まゝ或ハ百年ニ一ふと云時珍曰松ニ三月抽

猶生花長ヒ六寸云
と足跡と云々や

小路芽

罌粟若葉

採為蔬○字彙
草菜可食者通

名為
蔬

角心草

芦の芽

芦の穂

食フ
二堪

夕リ竹笋
ノ如シ

掌菜

二月初種
と下す

水菜

芥

落藜菜

莖柔脆中空其葉綠膩柔厚直出
為蔬食味脆美四月開碎紅花
赤根菜氏云フ

草薺

野老

活大根

莖立菜

莖菜

草薺

芥ノ異名也

又別種也

磯菜摘

磯辺の

正月

服食門

忌衣初

忌衣

正月衣

補首小袖

ひめけり丸

千梅力篋舒輪ニ飛馬始トカケリ春耕カ糸切齒ニ是ヲ難ス真名曆ニハ
火水始トアリト部家秘説ナリトソ或書ニ内裏ニテハ采ヲ采ト云○采
ハ蓬萊臺ニ始リ粥ハ七種ニ始ル飯ノ始モ亦
アルヘシ何ソ馬乘初アリテ馬始アラシヤ

螺者

其形似蝸牛其類多此物為新年増
之酒者若似海贏故並用者乎

海贏身

色形似田螺而大
商賈每除夜及歲

始為必用酒者言取千
倍万倍貨殖之祝乎

屠以換

白散

増度嶂散

江次

第二元二三供御茶中畧一獻屠糲散二獻神明白散三獻度嶂散○紀叟ニ
古屠糲之屠忌死尸之尸加一点作尸是本朝之故實也○屠糲酒廣句元日

飲之可
除瘟氣

藥子

江次第ニ奉仰之人求童女未
嫁之者○小女ヨリ先ツ飲ム

増椒拍酒

楚

歲時記ニ元日進椒拍酒椒是玉衡星精也服之
令人身輕能走拍是仙菜也椒酒トモ椒觸トモ

齒固

カタ

ムルノ羨鏡餅

大服

人ノ五臟ハ五味ヲ以テ養フヘキニ苦キヲ食フ
ナトヲ祝也 掃ニ茶ヲ服メ齡ヲ延フコレ福ニ又服ハ福ノ音ナ

カリテ祝詞
トス元日ニ

雜煮

田原子

生海鼠トモ又
ゴメトモ

芋頭

踏鴨

大根祝

かんを祝ふトハ増
蔓といふトモ

増開牛房

増開豆

開牛房
ハ生牛

蒨薯木のぬくこれを煮る豆ハ水煮の大豆ニ土忌ニ登テ
煎煮の緒の左太ニ並クこれを煮のりのとりの

押粘

粘の白干ニ粘ハ年魚としてめて
江の才又元日押粘一杯奉塩粘一杯云々

若餅

三日の内

につく餅
のふと云

萩糰

補若菜糰

具足鏡子

重出ス○註
ハ三才門ヲ

見ヘ

赤豆糰祝

日十五

糰柱

カユノ中へ餅ヲ入テ
食スルヲカユハシラ

正月

ト 彌木 補 彌杖 禁中も彌杖もて女房もてハ男子を生すとて折ことせ

公交に差事虫を亡しうし日之を首天狗と称其才地考とぬよりて小豆糲を煮て天狗を煮て食すれと手中の取氣を除くとソノ説ありと云

骨正月

北 京大坂にて新年の祝に煮て餅の肺を用日 由て魚骨に大豆兩の糟を入焚熟し食

おしるい食 北日赤子 京師の俗此日小豆赤子を食上

海苔

青海苔 増 鰯冠菜 増 真津苔

トサカノリオキツノリハ一物ナラン本書復ニ出タレト

冬うれの磯くや釣るところハ公前トアリ又奥津ニテキクニ正月ヨリ取レルトイフ

増 海草類

葛西苔

雲州十六嶋

皆紫菜類ナリ

海草類

海苔

龍鬚菜 乱髪ノゴトシ

鹿角菜

紫蘿藻

増 海索類

正月

公式門

元日節会

諸司葵

國柵葵

國柵笛

氷槌

七曜御曆

腹赤

元日節会ハ紫宸殿諸司葵トハ中勢省御曆葵宮内省氷槌葵腹赤葵等ニ公交ニ七曜御曆トハ日

月火水木金土の七曜をあらわしよりつひの屑ニ氷槌トハ去来物を和しより而くの槌を厚薄寸法以瓦石為平振葵之國柵葵とも應村天を吉野の宮ニ幸しなひ一付国柵人醴酒を以て献しうひより紀行り「公」と今の國柵の葵とて飲をうひ笛を吹ふらハ去来より年の始ニありと云 四方拜 元 公より属星を唱へ天地也ん之振赤トハ竹のうへを 朝拜 元 朝賀 小朝拜 朝拜 元 朝賀 小朝拜 朝拜 元 朝賀 小朝拜

公交に新契先を執おもや元日履の節ハ天皇大極殿より奉りて行ハせり之群臣皆礼服を具しうきれう御即位の儀式ナリ一葵矣 養務トハ去来の月也去来臨しもの有をむこよりやをばそれと記して今日養すらに新おハ百官悉くおすとソノともおおハ只殿と云 院拜礼日 朝觀行幸 天子年の始ニ上皇并母后の宮へ行幸のことあり

正月

增 二宮大宴

公慶二月二日王御以下二宮に参りておれお
てて登つくる二宮とハ東宮中宮の御事

白馬首會

七 七柱を供し馬を御覽し御弓の葵あり 公事
日 二月七日青馬を足きハ馬中の氣を除くと

りハ本支付。○件御馬二十一匹也○青きハ春の
色きりめて向きりのハ喜とめて足やりのあり

卯杖

卯杖 卯杖にて逢中の悪鬼を逐ふより○公事ニ卯杖とハ
持院天皇三年正月卯日大学寮よりたてまり

增 叙位

五 公事ニ是ハ法皇の年勞を美しく位
日 を次第に叙すことなり

增 女叙位

公事ニ是ハ女房の位階を叙する事なり
福年におふるもそ儀大くハ叙位に内

縣召

日 十一 天子弓場殿
か風の人を召す位階をさつる事なり○公事ニは除目につけて
るも八十年の學にもきハめかくく百丈の帝のみ虫のくく

御新

日 十五 百官悉く薪をもちて宮内
省にさめらるるなり

賊弓

御覽するはたふの直傳左ふの兵衛四府の舍人討傳
まくる後大羽村に發をくし是をより

舞御覽

十七 本書この日鶴の庵丁あ
日 是○公事ニは一條あり

男女踏歌

男踏歌十四日
女踏歌十六日

公事ニ是中の男女の声きくわくをなつて奉儀の祝賀と仰り
て是を後をせしめしむるなりハハナなり○内侍補の御と

えて踏歌の人さかり私云本書ニカサレノ御ハコジニ御ハ花付ル
夏トハ禄ノ綿ヲ付ルニマ男踏歌絶テ久シキヨレ女踏歌モタエシニ

御修法

八日ヨリ十 真言院御修法 真言院ハ宮中
日 四日マデ 二アリ後七日ノ御修法ト云

増 御祓會

八日ヨリ十 大極殿ニテ宜勝王經ヲ讀セラ増
日 四日マデ ル十四日御前ニテ内論アリ 大元師法

八日ヨリ十 公事ニ治部省より七ケ日この儀を行つるは人内務寮の官
日 四日マデ 人をもち御祓を給て授けおとる御祓を入組のつら

るをこれと申し御祓より給へる人討傳を討て是を治部省に
御祓をいとさしむ御祓の日ハ御祓をえのこく区上するなり

祇園削掛

元 寅尅神前ニテ經咒ヲ誦シ東西欄内ニ削掛ノ木左右
日 各六屯ヲ建ツコレ十二月ノ教ヲ表ス是ヲ卯杖ト稱

ス同時ニコレヲ燎クツタヘ云フソノ烟西ニ向ヘハ丹波五穀不熟東ニ
向ヘハ近江又然也故ニ西ニ居ル人高色ニ近江ニト呼フ東ノ人丹波

ニテ元朝ノ供物ヲ調フ是新年水火ヲアラタムルノ儀ナリ恭詣ノ人亦
ソノ火ヲ携テ家ニ飯リ

元日ノアツモノヲ煮ル

煮方詣

初寅詣

番御

或ハ
又弟

二ノ寅ノ日ヲ用ユ此日鞍ヲ近所往還ノ路辺ノ西ノ山岸ニ高ク小菴ヲ
カマヘ其内ヨリ繩ヲツケ賣ヲ路辺ニ下ケ恭詣ノ男女燧石ヲ求ント欲
スル者アレバ錢ヲ賣ニ入ル則チ着ル處ノ繩ヲ引上
ケ錢ノ多少ニ応メ燧石ヲ入レ再下ス是ヲ畚卸ト云
住吉社ノ側ニ船玉神トテ小社
アリ美由賣ノ神ヲ祭レルナリ
増 天狗宴 二 清水坂ノ西
日 豊岩寺ノ牛

王加於ニ夜ニ入強指客及ニ糸ヲ南ハニ引ニ坐シ宴飲ス坐上ノ人倍木
ヲモチ起テ舞フ是ヲ天狗酒盛ト云元持供酒盛ニ其体鹿象ニ略僧牛王
ヲ貼
裏白連 花下ニテ元朝其事ヲ玩フ発句扱茅三迫
ス 梓ニノセテ市中ニ賣ル〇北野社四日

裏白連 裏白連アリ鹿相ニテ懐帛ノ表ハカリニ書
シヨリ流例トナル俳諧亦コレニ效フトゾ
星ノ形像ヲ彫テ禁裡院中ヘハ佛工所ヨリ調進ス是ヲ顯密院陽家ニ仰

テ星供ヲ行ハセ玉ヲ民間モ亦星ヲ祭ル九曜ノ次第羅土水金日火計月
木ト一歳ヨリ九歳マテ至リ十歳ヨリ十八歳ト九年目ノニクリ返シ
テ當年星トナルナリ羅計火ノ三ツハ惡星之法ノ如クニ祀ルヘシトゾ

其凶セルヲ去年ヨ
リ求メ置テマツル
初夜申 増 初卯詣 住吉卯
ノ札ヲ

授ク武州本所龜井
戸妙義山モ同シ
箕面富 七 夜ニ振州豊島郡
日 箕面山滝安寺

増 九 攝州西宮今日蛭子等廣田ノ社ニ臨幸客相ノ異ナルヲ人
ノ見ニフヲ耻玉フノ諺ト成テ村民戸ヲ閉テ外ニ出ス門

松ヲ逆ニタテ、居籠ノ祭ト云明且諸家
各戸ヲ閉テ社糸ス世俗十日蛭子ト云 十日蛭子 十 攝州西成郡
今宮村ニ在

リ諺ニ此神ハ聳ニ在ストテ恭詣ノ諸人社ノ後ノ板羽目ヲタ、ク其音
益夜喧シコレ諸願ヲ祈ル謂ニ街ニ采花袋蜈蚣小判等ノ作り物ヲ賣ル

下向ノ葦買モトメテ笹ノ枝ニ結ビサゲテ又賣處ノ鳥帽子冠ヲ買テ頭
ニイタゞキ往來ノ人ヲ笑ハセ奥人ル業アリ道路竹ノ林ヲナセリ

常陸帶 十 鹿嶋此日男女ノ名ヲ布帶ニ書記シ神前ニ
置社人コレヲ取リ授ク相見テ以婚姻ヲ定ム

増 住吉御弓 紀叟正月十三日其或社人正鵠ニ准シ尺三寸ノ的ヲ立テ
立合射之勝負ヲ論スルニアラズ神叟ナリ

平岡御粥 十五 河州小豆粥ヲ煮テ神供トシ五穀ノ類ノ種物五十
四品ヲ一管毎ニ書付テ釜中ヘ浸シ扱管ヲ刻テ管

中ノ粥ノ多少ニヨリテ耕作ノ吉凶ヲ
ウラナヒ恭詣ノ諸人ニ告シラストゾ 厄神祭 十九 山州八幡御
日 旅所ニアリ

古此処ニ祗園社アリ故ニ獲民將未
ノ本符ヲ賣ル疫除ナリ 下 安藝下ノ亥日ヨリ二月初
日 洛中遊

覽ノ始トス京俗
所謂弁當始ナリ 嚴修祭 下 安藝下ノ亥日ヨリ二月初
日 洛中遊

正月三春

考云神代卷市持嶋姬命ト号
又近国ヨリ乘船参詣群集ス

三春渡門

雲註上ニアリ長閑長閑ハイツマテモ隙ナルヲ俗ニノトカ
云ハ温和暄和ト云字ナト能アタレリ

霽ぬくよのぬくい暖ぬくよのぬくい水ぬるぬくよのぬくいあのおき

春の水春風風和東風山笑ふ山笑ふ

山黛黛、畫眉墨也深青也共ニ春山ノ形容ヲ云フ暎暎繼起

去年十モニ古抄ハ正月ノ季ナカラ當用ニ依ル今年二の替り

木地炉縁春ハホコリ立ヲ以テ塗物ヲ忌ムト云月花月ハ四季ニ有テ花ハ春ニ限ル故二月

花ハ春ニ○昔源氏梅くえこむ盤をて供えり浅みどりなるやうくうのりにはアリ

呂の調春ノ調子ニ○王澤抄ニハ大以呂律四季分時春秋律也夏冬呂也委分半月律也重月呂也又古抄ニハ律ノ調ハ秋ニ

シテ呂ハ雜トスルト云數入さうに平句をてハ三月に浴出代さうに平句をてハ三月に浴

十六餅といハ略して六餅と和民家旧年嫁しにハ六餅といハ大和の俚語をて數入といハ大

淑氣淑ハ善也和也淑氣ハ春景也春雨本書ニ三鳥ノ一也不可知云百千鳥本書ニ三鳥ノ一也不可知云

先川先川先川学歌○或書にもあま学学經侍經侍カケルカケル

金衣金衣白白補補およみおよみ約約果鳥ハコ鳥

とも色とも色とよめるとよめるあありあありも又鼻も又鼻ののも翡翠も翡翠と洗と洗不問不問或ハ或ハや

こくこくととははこくこくハ中畧ハ中畧之果之果ととちくちくハ早小ハ早小の二字の二字ああんんも

多多轉轉ルル水水多多轉轉ルル鳥鳥多多轉轉ルル鳥鳥多多轉轉ルル鳥鳥

スルスル鳥鳥ニカホニカホヨ鳥ヨ鳥トモ

蜺

蛤

蛤

俗ニハマクリト名ク

蛭

形色蛤ニ似テ小ニ

烏賊

蛸

飯蛸

和ニ三

鱒魚而小凡五六寸許其跃如鳥卵跃中満白

鷹

花

若菜

初菜

補新菜

愚云先ツ心月ナランカ

若芝

さしづつば

本書ニ若叶ノ一ト云云大和物語ニある人の娘虎杖をゆきせむてゆり又ゆりて明日も又来かん

と約束く袋ときせむてゆり又ゆりて明日も又来かん

ぬ袋と云君はゆりて虎杖をさしづつばもゆりて

山葵

三葉芥

草芥

芥蒿摘

嫁菜

姫うはら

我書トモ書ク鶏腸叶トモ秋ニ至テ芥ヲ摘ク菊花ノ如シ草

今俗ニ野菊ノ黄色ナルヲ山菊トイヒ我蒿ヲ野菊トイフ

摘菜

摘草

柳

川そのま

風たそ

春初生柔莢即開黄莢花 華之始生曰莢

青饅

和ニ用芥葉青合醋和魚脰食之俗云阿平乃太是也

于大根

干菜

り

肥煎

昔ハ元日家内ニコレヲ擣置アリテ売ル説アリ昔ハ蓬萊臺ニモレク今ハ白采ヲ用ユ都ニハ正

月多クコレヲ売ル大坂天王寺常ニウル 當用ニヨツテ三月ニ用ユ

苺姑

於毛委加ノ根ニ白久和井ト云

馬芋

不登伊ノ根ニ

山椒皮

粗敲ヲ刮リ去テ用ユ

搔餅

震汲

天仙瀨名流霞仙家ノ故事酒ヲノムト云

耳海苔

干鰯

佐保姫

春ヲ領スル神ニ誹益集造化の神ニ海田姫も月一但神祇

田山ハ西ニあり則東西ハ春秋の方角ニ依てけ名として守らむと云

祭

二月

三才門

如月

け月さむつりて花をまに
きらんとしてまねと云

栴見月

衣冠忌

小正月令月

纂要二月為仲
陽又曰令月

仲春

陽中

曆志
春為

夾鐘

律〇月令廣義二月増好イ
之律遂為月名云々
蛰

二月節〇孝經緯
蟄東震驚起而出

中和節

以二月朔
為中和節

春分

二月ノ
中

一夜正月

朔

年賀

二見貝ニ古ハ子丑寅ノ人若菜ヲ賀シ扇紅葉
雪ト配レテ賀ス今俗ニ随フ云々此注クハ

卯辰巳の人形を賀し、年未申の人形を賀し、酉戌亥の人形を賀するにやまらばハ辰季に配すると見えたり本注解しかり
今倍々隆々とハまて春とあせむ意にやこれハ巳十の賀み十の賀ふとの予なり「卯辰と賀しハ辰の端とを賀して卯末の家算を彩るん天々の御賀ハ仁明天皇のお祥ニ年三月に巳十の御賀これ始こと又あると正月より六月迄とせれる人ハ花の賀を祝ひ七月

より十二月迄とせれる人ハ
お祭の賀をいとよと云々

二日灸

説昭あつた効強
他日の倍云々云

時心

登坂月附とて彼岸
の中日をいふとそ

社日

春分前後ニ近キ戌日
社櫻ヲ祀リ農祥ヲ祈

ルニ〇社日ハ土地ノ女神也又今立春後第五戌日為春社立秋後第五戌日為秋社主社之神曰勾芒「社翁雨ハ社日ノ雨ナリ」治聾洞ハ社日洞ヲ飲テ耳聾ヲ治スルヲナリ
出代マ 「新糸」
古糸 今糸

此季止ル

此季止ル

陽炎

いとや

遊氣ニ或ハ
水氣ニトモ

燒野

山燒

畑燒

藁燒

芝燒

すくらの為

田畑を燒ハ作おの害と虫の根を断つ意ニ山をやハ法草のよくをす為ニさくらハ燒てまゑきをとり

代掻

田々馬

田打

耕

畑打

畠打

畔塗

種子時

麻

籾

藍

種井

種を漬
ス井ニ

田を製

風巾 蛸上ルハ東言葉ニ

穉月 貝寄風 二月

十九日廿日以發彼の浦辺ニ吹風をリノニハ風を吹よせし。貝を居て
二月廿二日何屋長衣代書の造花ニつけて上宮太子へ献ぎ貝住吉へ
吹寄るハ就祿より太子へ持ると
此貝の形模のむに似たりと云

初雷 初霜ひり

二月

氣飛門

鳥の巢

古巢

鶴

鷹

鶺鴒等大鳥の巢

但雜ニモナル

法を子

子雀

靉雀

子雀 其外

とも

継尾鶯

白尾鶯

春春ハ山へ移らん子と云上
此鶯の白き羽を継て云ふより

ゆるやんえまれと
鳴心と云ふとかり

鳴鳥 鶯

鶯

白鶯

伯山

新鶯

鈴子さす一山にわく音と鈴子のりく
不と史をて未ぬ小りて鶯

此鶯もり上鈴子さすハ鈴の鳴るやうにさすも鶯も此
鈴と付らるハ鶯なりと云 叢中へ飛入る鶯の
辰不のちれぬ時鈴の音とすておとくえと云

アムコウノ 戸の名所

春多ニメ
去トゾ

燕

和名豆波久良女俗云ツ
バクヲ又ツバメ乙鳥ト

モ玄鳥トモ書ク春分ニ
至トモ春社ニ来ルトモ

帰鳥

四十雀

頭黒面黒白シテ白
円紋胸背灰青色清

滑 五十雀

四十雀ノ老ナル者毛ヲカ工色稍異
ナリ形亦大雌ハ腹ノ雲紋幽微ナリ

小雀

状山雀ニ似テ小ク山林ニ多シ 頭黒頬白脊腹白ク
翅尾黒声滑交サヘツル 捷捷ニメ上下見カタレ

山雀

状頬白ニ似テ頭黄白ニメ赤色ヲ帯フ 眼額ノ辺黒條アリ背灰
赤嘴胸尾黒腹淡赤性慧巧能サヘツル 好テ胡桃ヲ食フ

掠鳥

形小鳩ノコトシ 腹白背灰黒脊下黒白カサナリ 眉淡黄領以下
白ク羽黒白交リ嘴脚脛黄色鶺鴒ニ似テ喧ク好テ群ヲ成ヌ又小

種アリ

鶺鴒

形鶺鴒ヨリ小シ 腹背腹トモニ灰赤色 眼辺ニ白色アリ
翻灰黒其小羽ニ青黄斑アリ 啄脛黒ヨク鳴テ諸

鳥ノ色ヲ為又日雀狀四十雀ニ似テ小シ豉背赤人言ヲナス 鵠色類返白黒相交リ腹白ク翅尾黒シ 啄木狀大

或ハ青色ナルモ亦アリ其紅腹白メ淡黒斑アリ脊翅尾黒白横彪ヲナス

鶉菊戴狀眼白鳥ニ似テ脊翅青綠色腹灰青色羽末黒ク項上ニ黄毛花ノ如キ者ヲイタク

白斑アリ嘴スコシ曲テ厚ク淺黄白尾短ク好テ 豆粟ヲ食フ能クハツル比志利古木利ト言カ如シ

以上ノ類行トカ歸ルトカ云テ春ナリ

頰赤 狀雀ヨリ小クシテ脊色雀ノ如シ頰赤ク胸 雌鶉ノ文アリ色青鶉ニ似テ細高シ 鶉雀ヨリ小

翠雀 碧鳥氏大雀ノ如シ頭背翮上翠色頰領ヨリ臆下ニ至 純黒胸腹白嘴脚尾トモニ蒼色ソノ色円滑滑噴ナリ

連雀 唐雀ナリ時々群習ス今俗ニ称スルハ雀ノ毛冠有ナリ或ハ尾 ヲヒラキ舞カ如シ畧孔雀ノ形勢ニ似タリ色比伊ト言カ

頰白鳥 畫眉鳥氏狀鶯ヨリ大ニメ灰赤色眉白ク画カ 如シ頰亦白メ間黒ク背上黒斑アリ翅尾畧黒

ク尾兩端白毛アリ腹スコシ赤黄色臆下赤斑アリ足 赤黒其色小鈴ノ音アル者ヲ謂テ斤鈴諸鈴ノ名アリ 鶉猿子鳥ト

如ニ身赤シ又云大甘雀ノ如ク全體灰黒胸腹淡赤色羽灰黒色ニメ黒 彪アリ尾下兩端白キモノニツ其嘴短メ赤黒脚黒ク頂灰黒頭ヨリ胸ニ

至リ淡赤ニメ白圈アリ千葉菊花ノ紋ノ如シ 猿麻之古照麻之古大麻之古アリ 鶉鶉

クミ狀鶉鶉ノ如ニメ灰黒色俗云黒 眞珠ノ如シ脊毛紫赤浪文アリ○毛トキハ必南翹ストソ晋南ニ懷南ト

云江左ニ逐影ト云○近年亦中華ヨリ来ルヲ最珍トス狀矮鶉ノ雌ニ似

テ豉鶉ノ如シサ 同白鳥 小鳥ナリ鶉鶉ニ似テ豉背翅尾 淡萌黄色ナリ眼眶ニ白圈アリ

胸臆腹白メ折色ヲ 鶉鶉子鳥 常ニ山林ニスミテ百千群ヲナ

帯フヨク群ヲナス 鶉鶉 天ヲ蔽フ狀雀ニ似テ大嘴太

ク円シ豉頸灰蒼折班アリ領黄赤 鶉鶉 形雀ニ似テ黄赤色山林

嘴白背蒼黒ニ赤ヲ帯フ里班アリ 鶉鶉 正字不詳狀鶉鶉ノ如ニメ豉背

額鳥 狀鶉ニ似テ小ク 伊須加鳥 蒼赤腹臆赤紫嘴蒼メ齟齬ス

以上ノ類一句離テハ雜ナリ季ニワレテハ春秋飯

黄梅

臘梅

正月ニ黄花ヲ開ク故ニ迎春
花ト名ク花形梅ニ似タリ

红梅

豊後梅

大花白八重帯淡紅
亦越中梅似豊後

座論梅

中花浅紅千葉其
實朶コトニ四五

穎長ルニ随テ飄落スル
ト坐ヲ論スルカ如シ

接木

接穂

春分前後
ニ接ク

初梅

山梅

一重梅

彼岸梅

児梅ハ山梅
ノ一種ナリ

増
然共梅

彼岸梅に先きてハきのぬを多く梅
のえをりりま本み及にるぬ小本あり

胡頹子

平林

ニ生スル木ニ葉ハ海棠ニ似テ長ク白花ヲ生ス實ハ山茱萸ノ如シ○京
都方言ニ山茱萸ヲ苗代ガミト云トゾ○和ニ當春月種苗時實熟大如小

東名各苗
代胡頹子

青辛

ハ九月下種
三月開黄花

巖

山根州

拔菜

春月先ツ花ヲ生ス筆ノ如シ別ニ莖
葉ヲ生ス杉菜ト名ク枚ニ似タリ

天花菜

月

筆つ毛

枚菜ノ側
ニ生ス

松菜

松ニ似
タリ

莖

一夜子

手向子

壺莖

花紫色一枝
七葉ニ花両

三莖

出ル

防風

初生葉ノ形芹ニ数メ淡緑一莖ニ三葉其莖赤紫
醋未醋ニ和テ茹フ稍長メ葉円ク尖鋸齒アリテ

深青色五月細白花ヲ
ヒラキ子ヲ結フ

蓮根梅

蓮根

虎杖

よのよ書

莖ハ竹笋ノ状のめく葉ハ円クして香の葉に似たり虎
ハ其班をいひ杖ハ其莖をいひ小児其莖を折て皮を剥

去て嗽ふ味酸一〇七月
并々似菊淡紅九月結實

独活

初花

花と竹

蒲公英

穀州

俗稱
藤菜

秋菜

若菜

若菜

若菜

若菜

莖子ハ葉香に似て莖赤く節赤一二月を
開く紫白を葉を結く白色あり秋熟中〇花

根とて紫以
て葉を深

菊苗

菜分根

菜の苗

沼苔花

二月
開花

成簇青白色ニ更開花随即落人罕見之
其花淡青色如山椒粒無葩二黙一雙

菜の花

大根花

苜

川苜

二月彼岸下種三月月生
苗葉四月五月萎を

補唐苜

生ニテ
食フ味

胡瓜ノ
ゴトシ

薺

眉作花

紫莖

狗脊

其根
黒色

長三四寸 夏 破 茅花 春茅ヲ生シ地ニ布テ針ノ如シ食フ 如狗脊骨 夏ハ甚小兒ニ益アリ夏白花ヲ生ス

五枚花 ぎげらむ 葷 野蒜

葱 蒜 胡椒 此數食味ヲ 主トセンカ 髮 女兒

ヲ取テ髪ヲ結マ子 ヒス故ニ此名アリ 蕪の花 葉地ニ布ク葉ノ形蒲公英ノ如シ細白花ヲヒラキ實ヲ結フ三

角ニメ三強ノ掄ニ似タリ三線 增ニハトコトハナ 接骨木花 三ハ月小白花

艸ト名ク女児ヘンククカト云 增コナギツ 水葱摘 葉厚メ葱姑ニ似

て五出まき葉もとも両説不同 咲ナギノコナギトハ春ノ若葉ノ時ヲ云ナリ

二月

公式門

釋奠 上 礼記王制 親其尊長 祭先師 〇公室に大學寮として

初年祭 四 神祇官の祭神七百三十七座 国司の祭神二千三百九十

列見 十一 公室に大政友として六位以下の養老あり 若

初午 稻荷あり 稻荷社在山城国紀伊郡元正帝御宇 当社影

四年二月九日也 増ミツ下 水間祭 上 泉沙水間寺 本尊十一面觀

此日午日也トゾ 増ミツ下 摩耶祭 上 攝妙免原郡本尊十一面觀

二歳の厄難除ニ奉祈の人 増ミツ下 彼岸 金剛疏 生死為此岸

土産ノ草 藤と得テ去ス 難と祈るとしてをひきく希くを土産ノ 彼岸 湍繁為彼岸煩惱為

中流云々即生死ノ此岸ヨリ煩惱ノ中 踊念佛 彼岸ノ中日天王

流ヲ渡リ涅槃ノ彼岸ニ到ルナリトソ

夏アリ法会羊二大和河内ノ豪家ノ禪門来テ十徳ヲ着シ鉢ニ紐ヲ付テ
手ニ持タ、クミ踊ルニハアラス一心不乱ニ念仏メ誠ニ感ニ堪テ踊ル
カ如ク見ユルニ〇時宗踊念仏ハ
御影堂ナリ彼岸中コレヲ行フ
吉野保祀 朔 大和第五
日 月より来

五月迄長日不退の仍人本堂の座をしく敷く餅
増 二月堂 行 朔
日 月より来

ヨリ十四日迄牛玉加持ノ行法
春日祭 上 大和祭神四
申 座鹿鳴神香

取神天津児屋根命カス姫太神二月十一月辰日ヨリ成日
テ行ハル申ノ日勅使タツ式マアリ御山郷取外近也

御柳昇 上 何レノ処ニヤ後勅スヘシ但江次第大原野祭ノ下ニ積
申 舞次於鳥井下洗手昇御棚次着庭中座トアリコレニヤ

薪能 七日ヨリ十 南都真福寺南大門ノ前ニテ四座ノ役
四日マデ 者相ツトム無火ヲタク故ニ薪能ト云

水取 奈良二月堂ニテ七日夜十二日夜開加井ノ水ヲ取矣府ヲ貼テ
世ニ出スコレヲ二月堂ノ水取ト云矣府ハ牛玉ナリ年中用ル

処ノ水コノ西夜ニクミテ桶ニ蓄フ 比良八海 五日 近江祭
神猿田

彦命也本地堂ニテ 祇園八講 八 山城今絶テ
法華八講ヲ修ス 日 此美ナキカ

大原野祭 上 山城京西四里許祭神春日社ニ同シ后宮ノ泰ラセ玉
卯 ハンタメウツシ祭レルニ十一月中子日モ祭日ナリ

涅槃 十五日 仏の別も 去一佛 秀の果 涅槃像 涅槃
謂超脱輪廻出離生 死之地非謂死也トソ 清凉寺釈迦堂ノ前ニ大
火ヲ点シ地丁人各タイマツヲ巡リ念仏ヲ唱へ節ヲ撃テ 誠松ニ本建テ暮ニ及テ

踊躍ス曼西城ニテ釈迦ヲ塾ルノ遺意ナリ 常乐會 十
日 天王寺真福寺ニ 按以下衆分マテ光孝天皇ノ

積塔 十六 洛高倉綾小路清聚菴ニテ換
日 あり涅槃會ニ全 按以下衆分マテ光孝天皇ノ

皇子雨夜御子ノタメニ石塔會ヲ修ス守誓神ノ像ヲカケテ各コレヲ拜
シ心經ヲ誦ス其後大瓶ノ酒ヲクム六派ノ中ヨリ四人ヲ撰テ平家ヲ説
シム相傳フ雨夜皇子ハ目盲ユヘ衆盲ヲ愍ム明日

皇子ノ忌日ニ六月十九日納涼會ヲ座既ノ涼ト云 浅間祭 九
日 氏 九二 駿河安部郡祭神木花咲耶姬命左天津彦火瓊瓊杵尊右栲幡杵

外ニ於テ蓑ヲ商フ 天王寺聖應太子ノ鳳
近郷ノ者買之 日 輦聖灵院ヨリ六時堂

へ至ルノ会式ニ九一日 小川御忌日 九五 山城王城ノ西半里許
九二日試樂舞樂アリ 日 ヲ去祭神廟中將殿同

二月三月

百五日有疾風甚雨謂之寒食亦清明節ヨリ二日前ニ

蹴鞠 秋十

火ヲ斷ツアリハ子推カ焚死ヲ惜ムヨリ起ル也

揄柳ノ火ヲ給フ

日長繩ヲ高木ニカケ士女ソノ上ニ立テコレヲ

推引シテ戯トス天寶遺事宮中寒食競立鞦韆

四時ニ国火ヲ変ルアリ春ハ榆柳夏ハ枣杏季夏ハ棗拓秋ハ柞桐冬ハ

槐檀ナリ唐ノ時唯清明ニ榆柳ノ火ヲトリ近臣戚里ニ玉フ又火ヲ夕子

シ故ナリ唐榆ハ白扮イマダ葉ヲ生ゼガ

ル時ニ莢ヲ生ス小錢ノゴトシ亦數種アリ

春のふり 行春 補 春のふり

春漢

三月癸

三月

氣形門

結花郭公

時季第モ第第と結モ

麦鷄

田麦長キ時コレヲ取モノヲ呼テ麦鷄

ト云食味ヲ賞スル名ニ

呼子香

本草ニ三香の一不可知〇一説猪とも一説麝ともあり或祕説ニ早竟ト云テ香ハ陽燄の香

列子香と俗ニ云かつこう香の事云古今集極の秘するて不マモ他傳者ニ又呼子香ハ荷香の事といへる丹とくき後ニ似てら香ニ本ととあけハ人をよぶヤウあれバ

田鼠成鷄

若鮎

小飯

汲飯

登鮎

鮎

搗魚

狀白魚ニ似テ又異ナリ常州櫻川霞ヶ浦辺ニ多シトゾ

鱒

搗細

初細

細細

搗の味時香ニ多くとあはるる

搗織

織又

もかくウクヒと本も

虻

翼ヲ以テ鳴ラス

蟻飼

菓子

蟻種

三月

三月

柳

本書上已ノ下ニカクアレモ愚按ニ桃柳イケルト
カソナユルトカナクテハ上己ノ用ニ非ラシカ

柳酒古竹

上己ニ内裡ノ申美酒
ニ入ラル、桃ナリ

柳の花

二子代子

毛柳花

二月生苗莖葉柔軟長寸許白茸
如鼠耳之毛開小黄花成穗結細

氣麴搗

梨花六
出

子茸ハ草生ル貌母子
艸トモ仏耳艸トモ

梨の花

一種ハソノ枝軟ニハ一種
ハ其莖剛シ黄花四片シ

淡江ナリ紅ニメハ重モア
リ葉ハ円ニメ尖アリ

連翹

一種ハソノ枝軟ニハ一種
ハ其莖剛シ黄花四片シ

海棠花

眠れ花

本書ニカクアレドモカラナシ
ハ林檎ノ種類ニアリ海棠梨ト

書ク異種同
名ナランカ

揚梅花

樹高丈余葉細厚コブシ
冬不凋二月開花

幣ノ如シ俗呼テ幣辛夷ト云
一名木筆トハ未開ノ形ニ

林檎花

莖葉海棠ニ類メ花ノ蒼紅色開ケ
ハ白ニ微紅ヲ帶フ海棠花ニ似テ小也

李の花

細白花ヲ開ク實ハ毒
アリ食テ人ヲ殺ス

躑躅花

躑躅

躑躅白ツ、シ蓮花ツ、シ姫
其外種殊甚クシ春サクハ映山紅ノ類ナリ

木瓜花

本目其樹枝狀如
斜其葉光而厚春

未開花深紅色餘ハ林檎ト一類ニ種ナリ〇呪咀
ノ仏供トスルモノハ擲之故ニヨリツ子賞セス

本蓮花

本字ナカ余ヨリ五六丈トモ又本葉花云蒼蓮花ニ似
テモ色内白ク外紫又紫ハカリモアリ花ノ時葉ナシ

櫻桃

和ニ
云本

目其樹不遜高其葉團有尖及細齒春初開白花繁英如雪結實一枝數十
先百果而三月熟畧其實熟時深紅色者名朱櫻又其花小二分許白色帶微

赤但謂如雪者不致實大サ小金相ハカリニ
メ桃ト異ルナシ味甘シ鶯桃含桃菴桃氏 玉帶花 櫻ノ異種之花景
鳥ニ櫻桃一名朱

櫻和名波々加一云迹波佐久良此註ヲモテ按レハ櫻桃玉帶花一物二名
ノヤウナレド和三山櫻桃樹如朱櫻但葉長尖不團子小而尖如麥冬毛生

青熟黃赤亦不光沢而味辛惡不堪食按葉似櫻桃而薄扁長尖不皺三月開
花似小粉團花而小弁五六分許不結實又有花赤者トソ其園モ櫻桃ハ

木太ク葉実大ク山櫻桃ハ木細ク葉花シ
ゲク靱ヘタルガ如シ朱桃麥櫻李桃氏 沉了花 樹高三四尺花丁
香ノ如ニメ紫色

既開クトキハ四出外淡紫内白ク十余朵コバナリ其香
烈メ沉香丁香相兼ルカ如シ故ニ名ク一名山礬又芸香 真樺花 本
ニカクアリテ四月ニ積殼ノ花アリ別種同名

ナルマ年浪艸和三等ニナシ尚後助スヘシ

花

蒼守

蒼園

橘

橘

橘 花繁英一ハ葉中テ三月ナクハ五月ニ出

江戶橘

葉盛赤一ハ葉中テ三月ナクハ五月ニ出

增 葉賢像

或

ハ葉トモ花増

序尾

花と葉ト視

増 新言雪降橘

唐新の雪降

新言の忍

増 沙葱橘

大輪ハ重洗者増

増 龍電

葉よてみり

増 揮橘

加小波一モ和ニ單八重ノ數岳大略ヲ記

化名竹

受見子補

加小波一モ和ニ單八重ノ數岳大略ヲ記

郁李花

庭橘

生 葉

メ高三四尺花形梅ニ似テ小ク白ニ紅

碎米花

叢生シテ高三四尺葉狭長ク縦理

アリ白花大サ錢バカリ又胡蘿蔔

小毛繸花

高四尺

葉狭長ク白

花寸半許

蘇枋の花

新説抄ニ和名にせす

仙露花

葉

花モ萩ニ似テ花黄大豆ノ花ニ似タリ嫩キ時粘フベシ

石楠花

花五出粉紅色形ツツシ

山梨の花

葉梨

其樹梨ニ似テ小ナ

東の花

四

小葉ヲ生シ五月葉稍長ノ葉間ニ小白花ヲ開ク微青ハ

馬薔

葉薔

ニ似テ長ク厚シ紫碧花ヲヒラ

麦藁

松露トモ和ニ

処松之津液與秋

九輪草

抽葶用小花似櫻柳花而大七層

是謂七重

橘草

九輪草ノ一

馬薔

山谷ニ生ス高

キハ一二尺枝葉茂盛ス葉狭長キト鋸齒アリ硬シ小白花ヲ開キ房ヲ作

合ヘリ城洲山

折の塔

塔ハ臺也雜談抄ニ和俗折ノ花ヲ呼テ折ノ臺

科辺ニ多シ

通子花

木通蔓草也蔓ハ即チ木通葉莖ヲ通ト云鞍馬ノ木芽漬

ハ通草也葉ハ五葉ニ分ル三月紫花ヲ開ク亦白花モ有リ

蒼容三ツニ分ル
秋口子ヲ結フ

狗杞

春苗ヲ生ス葉軟ニ食ニ堪タリ俗呼
テ甜菜トス六七月小紅紫花ヲ生ス

随テ實
ヲ結フ

他偷艸

葉車前葉ニ似タリ高五六寸黒皮ニテ莖ヲツ
ツム中ノ根ニヌク髭ノ如クナルアリ故ニ蝦

根ト名ク花アリ肉紅色或淡黄或赭色或外褐丹白
或外紫内黄或橙色或外青内白等アリ藜蘆任カク

苧蒿

高麗菊

吾妻菊

和ニ春開花似菊故名之濕莖葉食脆美然百
菊未開時有之故賞花不為蔬一菊後自生杖六

七月開花亦美也。
愚按吾妻菊別種平

花鬘

高尺余葉石龍莖ニ似テ小也莖ノ
ハシニ花ヲ開ク淡紅色旁ラニ西

耳翻リ上ル乃チ花弁也下ニ一ノ白舌ヲ垂ル中間
ニ藍色ノ点アリ表裏相對シテマ、高ク起ル

宝風花

莖ニ似テモアリヒカリナシ花黄ニメ河骨ノ
蒼ニ似タリ毒艸也十葉ハ美ニメ愛スベシ

五加木

メ茹

丁子艸

葉柳葉ニ似テ中ノ莖筋チト白
ク花丁子ニ似テ淡黄色ナリ 茗艸何竹目

藜荷作茗荷非
也茗茶名也

蒼耳

葉青白ク胡蔓ニ似タリ白蒼細莖蔓生ス四月中
子ヲ生ス又秋間ニ実ヲ結フトモ豨蕪ハメナモ

也
三月菜

三月大根

芋橙

芋種

芋の芽

若菰

真菰ノ
白芽ニ

山吹

おまかけ芋

ひみ子

みれし子

下学集除隙云々日本所謂山吹
是也俗呼款冬謂山吹者誤也

藤の花

二季艸

松見子

青麦

柳絮

葉長
成ノ

後中黒細子ヲ結フ莢オチテ裂出ツ白綿ノ如ク
ク凡ニ因テ吾ブ池沼ニ入レハ化メ萍トナル 莢の花 三月葉ヲ生
大ニ莖長サ丈余中ニ孔アリ糸アリ嫩キモノ皮ヲ剥キ食フヘ
シ五六月紫花ヲ開クトアリ俗ニ鬼蓮トイフ水沢中ニ生ス

藻初生

藻或ハ萍 穀雨
ノ節ノ気候ニ

茶摘

焙炒

初葉摘

令法

俗云料蒲高五七尺其葉茶及櫻ノ嫩葉ニ似テ菜
ニ三月小白花ヲ開ク飢民葉ヲ蒸テ食ス

春蘭花

花葉任ニ蘭ノ如ニメ葉短ク立スメ
ナビク霜雪ヲモ恐レス山中往々有之

三月

三月

服食門

艾餅

補

草餅

補

菱餅

昔ハ母子艸ヲ用ヒ今ハ艾苗ヲ用ユ艾餅ハ幽王ニ奉リシヨリ起レ

ソ

はこ餅

アキキナニス 胡葱餅

桃の酒

酒ニ桃茗ヲ漬テコレヲ飲メハ百

疾ヲ除シ顔増色ヲ益トゾ

白酒

艾餅以下イツレモ上巳ノ節物ニ但艸餅母子餅胡葱餅等ハ上巳ノミニモ限ルマシキカ

青さ

初熟麥ト書ノ説最大全ニ夜同苔葉の穂の差キと摺テ少ク炒ル。おと云と云

かめめ

同茶

穀雨ノ前後トモハ十八夜ノ前後トモ

櫻海苔

組洲ノ産

東

寒食ノ日麩ヲ以テ蒸餅ヲ為シテ東ヲマロメコレニ附ク

青精飯

同日揚桐ノ葉ヲトリ餅ヲ染ム色

青メ光アリコレヲ食フテ陽氣ヲ資ク

三月

公式門

鶯合

三

清涼殿南階ノ前ニテ此行夏アリ仙納弥市此事ニ預リ勝負ヲ決ス

増 御燈

北

山ノ峯ニテ天子ノ北斗ニ燈明ヲ奉リ玉ヲナリ

己日 杖

三 水辺ニ於テ杖ヲナス○杖ノ杖とハ光源氏伝ノ杖

と云

栗津祭

三 大友皇子ノ灵ヲ祭テ御灵ト号ス此祭今絶ス

石山祭

三

江州石山寺鎮守新宮八幡両神輿渡御於三十八社拜殿有衆伎法奉幣

増 一乘寺祭

五 洛北祭神

増 修学寺祭

五 此辺七郷同日祭アリ

水尾祭

九 丹波国桑田郡祭神清和天皇

やま

十 辰剋許上加茂南上野村ノ土民爲帽子素袍ヲ着或ハ異体ノ粧ヲナシテ先一村ノ捲堂ニ聚リ光念寺ノ北

上ノ御前社ニ詣テ各異口同音ニ安楽花ト唱ヘ太鼓笛ニテソノ節ヲ助ク然後大源菴ノ社下御前ノ社ニ往テ各踊躍フナシテ飯ル又上加茂梅

辻岡本河上三ヶ村ノ土民今宮ニ詣テ踊躍スル上野村ノ如シ本書ニヤスライ花ヨアスナ井花ヨトテ踊ルト云々

法華會

十

高雄縁記ニ紫野ニ人多ク集リテ高雄ハ法華會ヤスラニ果ヨト云ヘキヲヤスラヒハナト糺ストン



墨直令式 十二日 洛東 双林寺 南祭 中 石清水臨時祭也公事之定例
二月の以より奉行之為人位

弁人等の中定む中の辰の日試乐的なる所敷の縁に内侍子たてて天子
出所あり中畧舞人進み出中畧舞終りてまじりて試乐的直以ハ以ハ
れ修ぬとや中畧當日ハ御禊あり座座と位人つく中畧次の日ハ還立
の儀も亦ハ所ありてやけら坊敷とて知孟るくかとう云々

増 禊 禊祭 先代旧事記三月十四日祭大神狹井之神而執行疫公事之是
ハ大神狹井の二祭と云々と神祇令と裁より其意の死より

以ハ疫神を散く人となやまけらあてわれとあら
うんがとけをハるこくや神祇定めて行り

編 編出 中 神輿五社本山ヲ出大和大路ヨリ七條通ヲ歷
午 テ九條御旅所ニ入御旅所ニ在二十日トソ

壬 壬念仏 十四日ヨリ 心淨光院或ハ壬生寺ト称ス右敷日念仏アリ
北四日マテ 其間土人俳優ヲナス猿狂言ト云仏工定期朝

カ カ作ノ假面三面アリ猿捕 勸学会 十五日 勸学院三條北壬生ノ西
取等ノ面ヲ第一トスル由 日 二在り天台ノ大衆法華

ヲ 誦シ記典ノ儒者モ詩聯句ヲ成ヌ九月十五日 比良祭 十五日
吾同シ此処ハ藤氏ノ公マ若冠ノ時学文所也 日 武藏隅田

近 近江比良村神輿二基山王十禅 梅若祭 十五日 川ノ辺山
師若梅天神両社ノ祭ナリ



